



主な内容

同窓会レポート 東日本大震災 救援活動に参加して	
東日本大震災における宮城県東松島市の被災状況を視察して…木原正義…	(1)
あれから半年 進む時間、進めない時間……………江連昌秀…	(2)
平成 23 年度総会・懇親会報告 ……………	(4)
合田憲先生（昭和 38 年卒）を偲ぶ	
合田先生 もう一度お会いしたい！……………谷口有三…	(5)
合田先生 お世話になりました！……………神谷善弘…	(5)
古川成太郎先生を偲んで……………沖山秀司…	(6)
原田恒久先生（モスケ）を偲んで……………松田 順…	(6)
獨協祭に参加して早 4 年……………	(7)
小冊子「獨協の歴史」について……………	(8)
コラム・ドイツ……………柳原克忠…	(8)
中学サッカー部の動向……………	(10)
同窓生の芸術分野での活動が相次いで評価される……………	(11)
クラス会だより……………	(11)
私の近況……………	(17)
同窓会名簿の取り扱いと年度幹事の選任について……………	(20)
おわびと訂正……………	(20)
編集後記……………	(20)

<http://www.dokkyo-mejiro.com>

獨協同窓会 検索



題字・天野貞祐

第 77 号

平成 23 年 12 月 15 日発行

発行所 〒 112-0014 東京都文京区関口 3-8-1

TEL / FAX 03 (3946) 6352 (直通)

獨協同窓会 発行責任者 鈴木 莊太郎

同窓生レポート

東日本大震災 救援活動に参加して

東日本大震災における 宮城県東松島市の 被災状況を視察して

昭和 47 年卒 木原正義

はじめに

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、日本の観測史上最大のマグニチュード 9.1 を記録した東北地方太平洋沖地震は、東北地方から関東地方に及ぶ広範囲で大きな爪痕を残し、9 月 11 日現在死者 15,782 名、行方不明 4,086 名を出す未曾有の大震災となり、東日本大震災と命名された。

メディアを通じて現地の被害状況がリアルタイムで送られてくる中、たくさんの被災者が報告され、また獨協ドクターズクラブ、獨協医科大学の関係者からの情報から獨協の同窓生にも被害がでていることが判明しました。

何か出来ることはないか、と考えた同窓生もたくさんおられたことと思います。私は所属する蒲田医師会と大田区の合同支援チーム（医師、保健師、栄養士、歯科衛生士、大田区職員）に参加し、4 月 1 日、2 日の 2 日間、合計 13 名で宮城県東松島市へ赴いた。

東松島市の被災状況

東松島市は宮城県中部、仙台湾沿岸に位置し、北は石巻市、南は美里町、松島町と接している。人口 42,856 人。市内には航空自衛隊松島基地がある。中心部の矢本地区は海岸からの距離があり、被害は比較的少なく、市庁舎も残されていた（市の職員は全員無事）。しかし、隣の石巻市と同様に海岸の近くにある住宅地では甚大な被害が発生し、たくさんの犠牲者を出している。特に野蒜地区では避難所になっていた野蒜小学校が津波の被害に遭い、ここだけで 200 人以上の人が亡くなっている。

活動報告

私達はまず宮城県庁、東松島市庁舎等に赴き災害状



大田区災害救助隊

況、避難所や支援活動の様子を伺うとともに、被災現場で活動する医師団に会って現場での医療状況について報告を受けた。その後医療機関の被災状況を調査したが、東松島市では床下浸水程度でそのまま診療を再開できる病院、診療所がほとんどであった。しかし数件の診療所が津波により家屋ごと流され、命を落とされた医療関係者もみられた。すでに診療を再開している診療所を訪問し、現在の医療状況を聞くとともに、医薬品等を提供した。

予め持参していた救援物資のうち食料を給食センターに運搬し、生活必需品等は避難所に届けた。避難所では大切な家族と家を失い、失意のどん底にある方々が皆で力を合わせ、市の職員とともに動き回っている姿に感動し、そして私達が差し出したお菓子を受け取る時の子供達の笑顔がとても印象的だった。

今回の視察で解ったこと

私は今回の災害支援活動を通じて2つの宿題を授かりました。1つは災害支援の在り方。もう1つはいつか起こるであろう自分の住む地域での大震災に対し、どのように備え、対処すればいいのか、ということ。

災害支援をしたいと思っている方は沢山いるのですが、支援される側のニーズが解っていないで勝手に行動を起こすと逆に迷惑になったり、復興の妨げになってしまうケースがあります。一つの例として、被災地に向かうボランティアの車で渋滞が発生し、被災者向けの緊急支援物資がなかなか届かない、ということが多々あったようです。被災地においては外部に対して被災状況と必要物資などを出来るだけ正確に報告する広報担当者が絶対に必要で、その報告をもとに支援活動に参加することがとても大切であることが解りました。

今回の大震災では“想定外”という言葉がよく使われました。地震の規模、津波の高さなど想定を遥かに超えるものであり、これが甚大な被害をもたらしたことは事実です。ではどこまで想定すればいいのでしょうか。40メートル以上の津波を想定し、それ以上の防波堤を太平洋沿岸部全体に作っておけばいいのでしょうか？そんなことをしたら、美しい海の景観は失われ、自然も破壊されてしまうでしょう。

震災から半年が過ぎた今、被災地では復興に向け日々動き出しています。今回の被害を下に、より強固で確実な防災のためのハードがいつしか完成されることでしょうか。しかし最も大切なことは私達一人一人の心構えではないでしょうか。まずいつかくる地震に備えておくこと。今回のようにライフラインが使えない時を想定して、日頃から訓練しておくこと。そしていかにして自分の身を守り、周囲の人と協力し他人を救助し、さらに地域の公共機関と協力して復興に向け働く。つまり自助、共助、公助がとても大切であることを痛感しました。

今回の災害に対し、いち早く獨協中高の在校生が自



東松島市沿岸部の様子

分のお小遣いの中から義援金を集めたこと、江連昌秀君ほか大学生のボランティアや、現地に赴き被災地の方々と一緒になって復興に向けて活動されてきました多くの同窓生がいることを、大変誇りに思います。

最後になりましたが、東日本大震災にて被害を受けられました皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、1日も早い復興をお祈り致します。そして復興支援はまだ始まったばかりで、これから私達ができることはまだまだあります。公助の気持ちを絶やさず、いつまでも持ち続けたいと思います。

あれから半年 進む時間、進めない時間

平成 21 年 卒 江 連 昌 秀

今回の震災で亡くなられた方々、ご遺族の方々に心からお悔やみ申し上げます。そして今も仮設住宅などで、十分とは言えぬ状況で生活をなさっている方々に心からお見舞い申し上げます。私たちボランティアが、最善を尽くして被災地復興作業にあたることをお約束します。

ついに半年過ぎました。皆様は、まだあの日の事を覚えているでしょうか。経験したことのない強い揺れ、電車が止まってしまい家に帰れなかった人、学校や職場に泊まった人など…それぞれが大変な経験をなさったと思います。7か月を過ぎ、徐々に人々の記憶から消えている現実を目の当たりにして、悲しさと時間の進みの早さを実感しています。

私は3月30日～4月8日と、9月1日～9月15日まで、宮城県塩釜市の災害救援ボランティアとして活動してきました。カリタスジャパンという組織を通して派遣されました。最初は地震から2週間半ほどで被災地を訪れました。まだ新幹線も動いてなく、東京駅から緊急支援号のJRバスに乗って仙台まで行きました。途中の高速道路では、警視庁機動隊、自衛隊、レスキュー隊の災害派遣部隊だらけで、今回の震災が甚大な被害をもたらしたことを再認識させられました。仙台駅の周辺はほぼ日常生活を送っているかのように見えまし

た。コンビニやマクドナルドが閉店しているなど、東京では見たことのない風景でした。塩釜市は仙台駅から北に18kmほど進んだところにあります。私が行った時には、まだ電車が動いていなかったのバスで塩釜まで向かうことになりました。その途中に多賀城市があります。本当にテレビで見たままです。車が建物に突き刺さり、ひっくり返っていたり…そして1番驚いたのは、“ニオイ”でした。まさかニオイがするなんて思ってもいませんでした。テレビから伝わってこないのはニオイとヘドロの感触です。これは本当に現地に行って経験出来てよかったと思っています。

1回目の活動は、市内の個人宅を担当していました。海から50mのところの民家だったり、明太子とたらこの工場兼住居、築180年のお家…初めて目にする津波の被害は想像を超えるものでありました。それは、家の汚れやニオイ…それ以上に廃棄される家具の多さでした。ボランティアの作業内容は“ガレキ撤去”という風に思われていますが、実際はガレキどころか“引越し屋”に近い作業です。もちろん場所によっては土嚢を運んだりしますが、ほとんどは水を使った洗浄作業、家具の運びだしです。また、3月という時期もあり、雛人形を廃棄しているお家が多かったです。私も綺麗な雛人形を廃棄所まで持っていきました。“こんなに綺麗なのに…”“まだ使えそうなのに…”そう思う気持ちを押さえて、被災された方の指示で作業を進めていきます。時には作業をやめて被災された方とお話しをすることも大事な作業です。そして作業終了後、私たちが帰るときに必ず“またいつでもお声かけください！どうぞお身体を大事になさってください。”と声をかけて去ります。私たちは“被災された方を助けに来た。ただのお手伝いではなく、被災地を復興させる為に作業をしている！”というスタンスで活動していました。被災地に行って人の優しさにも触れました。作業をしている私たちに必ず差し入れをしてくださるのです。感謝の言葉しか出ませんでした。いつまでも他人を思いやる優しい心を持った人間でいたいものです。

そしてついに初めてのボランティアが終わり、21歳の誕生日を迎えた4月7日、明日は東京に帰る日、と後ろ髪をひかれる思いで寝ようとしていたところにヤツがやってきました。余震です。3.11後の最大余震で震度6弱でした。もう本当に地球のエネルギーで地面が揺さぶられている!!という感じでした。揺れて3秒で停電。町は真っ暗闇、津波警報のサイレンが鳴り響き、周囲は車のクラクションが鳴り響き、まさに異常事態でした。当時のベース(宿舍)のリーダーが私ともう1人の学生であったため、ベース内の人員確認、避難の誘導(先頭と最後尾)、声掛けなどしながら避難しました。気づく

と膝が震えていました。そして友達からの鳴り止まぬ電話、メール。これってものすごく嬉しいことなんですけど、実はとっても迷惑なんですね。それは何故か。停電で携帯電話の充電が出来ないから、です。半ば被災者になった私は“心配してくれているのは嬉しいけど、1件だけメールや電話をくれれば十分!”と思いました。極力携帯電話の電池を温存しておきたいからです。この余震によって断水(5日程)、停電(3日程)になってしまいました。また、担当していたお家もこの余震により、更にお家に傷が入ってしまい修理不能のため、やむを得ず解体するところも多かったです。更に後ろ髪をひかれる思いで東京に帰ってきました。

そして今回の活動。半年ぶりに訪れる塩釜の地は綺麗になっていました。思わず駅を降りて街を見た瞬間“ただいま”と言ってしまいました。たった10日しかいなかったのに、不思議なことに自分の故郷に帰ってきたかのような嬉しさと安心を感じました。電車も動いている、スーパーも営業をしている、信号が点いている…ちょっとしたことに感動出来ました。

今回の滞在は、3月に作業したところに訪問し被災された方とお話しをする。半年という節目を被災者の方と一緒に迎えたい。3月よりも質の高い作業を展開したい。この3つを大きな目的として活動しました。

まず3月に担当したお家の方に会う事出来ました。1件は築180年のお家で4月2日から4月7日まで担当していました。留守だったため連絡先を書いた紙をポストに入れておいたら翌日電話がかかってきて、元気にしていて、また私のチームにお願いしたい、と非常に嬉しい電話でした。このお家を一緒に担当していた地元の方にも連絡をして半ば同窓会のような楽しい現場でした。4月7日の余震によって家が更に傾いてしまい解体を決定したとか…しかもその決定を下すのに4か月かかったとか。自分の住んでいたところを壊すか否かでかなりの葛藤があったのだろうと思うと胸が痛いです。そこのご主人が今も廃棄するかしないかの仕分けをしていて、その後ろ姿がとても寂しげだったのが今でもはっきりと脳裏に浮かびます。

また、明太子とたらこの工場兼住居の跡地を見に行ったら、偶然そこお家の方が様子を見にいらしてい



松の木に引っ掛かってしまった網

たのでお話が出来ました。その方は気仙沼の方に親戚がいらっしゃるようですが、6名ほど亡くなられたそうです。“半年”が経とうとしているのに関わらず、被災された方にとっては、まだ時間が進んでいないのかな、と思いました。

今回の活動は工場や企業、島でした。震災当初は個人宅を優先することが行政の方針であったため、工場などのニーズが半年経とうとしている時にあった。また島に関しては、港の整備に時間がかかったこともあり、6月ごろから島の作業が開始された。塩釜には4つの島があり、全てが太平洋に面しているため、津波を直撃しているため、焼け野原のような状態になっているところがほとんどでした。私の行った桂島では誰一人亡くありませんが、島の親戚は残りの3つの島にいるご家族がほとんどのため、どのご家族でも親戚の何人かは亡くなっているというのが現実だそうです。ほかにも牡蠣の養殖のお手伝いもししてきました。漁船に乗り、海に浮かぶイカダに乗っての作業となりました。半年である9月11日14:46は海上で作業中のため黙祷をささげることは出来ませんでしたが、“この海にどれだけの命と生活が奪われたのだろう”と考えると自然の力の恐ろしさと、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするばかりでした。

今回の作業を通して、また新たな方と出会うことが出来ました。漁師、

大工、島の区長、遊覧船の係員、ボランティアに來た多くの方、そして多くの子供たちと触れ合う時間もありません。ベース(宿舎)から帰る時“行ってきます!”と言って出てきました。それは“俺の2つ目の故郷は塩釜だから。塩釜の人を助けるためにまた戻ってきます!”という気持ちを込めたからです。自分が手を付けたところは最大限の支援をして1分1秒早く復興させるために、これからも支援を続けていくつもりです。大学生や社会人に限らず、中学生や高校生も被災地でのボランティア活動に参加してみてください。実際中学生や高校生も来て作業をしていました。獨協のみんなも出来るはずですよ…いや、出来ることしかありません!!

東北地方の早期復興と行方不明者が“0人”になる日が来ることを切に願っています…。



平成23年度総会・懇親会報告

6月18日(土)午後5時より平成23年度獨協同窓会総会が母校の小講堂で開催された。

議事に先立って、前年度に亡くなられた同窓諸氏と東日本大震災で亡くなられた方々の冥福を祈り黙とうを捧げた。

続いて、総会出席者42名、委任状995名、合計1037名で総会成立条件が満たされたことが報告され、総会付議事項の審議に入り22年度事業報告、同収支決算、23年度事業計画、同収支予算案が原案通り承認された。さらに、第5号議案として提案された獨協同窓会会則の一部改正(第4条の4項:会員名簿の発行→会員名簿の作成及び管理)案を、追加した6号議案として新役員に監事として黒沼昭夫(昭20卒)君の就任を承認した。議事終了後、ご臨席いただいた渡辺和雄校長、笠井淳三副校長、本木善崇教頭より新任のご挨拶をいただいた。

懇親会は椿山荘・ギャラクシーの間に会場を移し6時30分より開宴となった。鈴木荘太郎会長(昭35卒)の挨拶の後、来賓の方々を代表して梶山皓獨協大学学長から祝辞をいただいた。古い卒業生には懐かしい世

界史を教えていただいた大久間慶四郎先生に乾杯のご発声をいただき、華やかな懇親会の幕開けとなった。渡辺校長からは母校の近況報告として、3月11日の震災の折には生徒140名、教員40名が校舎内に泊まり、同窓会やPTA等の支援で非常食の備蓄があり不自由なく過ごすことが出来、毛布をはじめ防寒対策も万全だったと感謝の言葉をいただいた。同窓会としても今後も引き続き支援(23年度事業計画に織り込み済み)をしていきたい。また、22年度大学合格実績も近來無い実績を上げたこと、永井前校長時代からの学校改革が実を結びつつあること、まだまだ課題は残っているが、同窓会の皆さまに安心していただける実績を出すために尽力したいと心強いお話も伺うことが出来た。今回も現役の先生方や若い卒業生の出席も多く、同窓会に対する理解を深めてもらう努力をしてきた同窓会執行部の成果の表れと評価したい。演劇部、アーチェリー部と2年続けてきた現役生の招待、今年度は活躍著しいブラスバンド部の生徒さんを招くことを考えていたが会場の広さと大きな音を出すことがネックとなり実現できなかったが、少人数の編成で

次年度は是非実現させたい。宴もたけなわの頃、6年半の長きにわたって同窓会事務局のお手伝いをしていた大蔵清音さんが6月末で退職されるとのことで、会長より感謝の意をこめて花束の贈呈をした。江連昌秀（平21卒）君からは東日本大震災の復興の手伝いにボランティアで参加した時の経験が語られ興味

をそそった。滞りなく懇親会も進み3月に卒業した新会員の紹介、全員による校歌斉唱、そして、本田光芳（昭25卒）君の閉会の辞でお開きとなった。

なお、会場で皆様をお願いしたスマイルボックス（寄付金）の合計金額は59,912円で寄付収入として処理した。

合田憲先生(昭和38年卒)を偲ぶ



長年にわたり獨協のドイツ語教育にご尽力された合田憲先生（昭和38年卒）は、平成23年5月3日に、66歳で逝去されました。謹んで哀悼の意を表したいと思います。

先生は、獨協中学・高等学校、そして獨協大学（1期生）の卒業生です。その後、学習

院大学大学院修士課程、2年間の非常勤講師を経て、昭和46年4月に獨協中学・高等学校教諭となりました。その後、昭和63年4月に開学2年目の姫路獨協大学へ助教授として赴任され、平成11年に教授（平成20年3月退職）、平成21年には名誉教授になられています。また、同窓会においても長く幹事、幹事長、副会長の要職につかれ、同窓会の発展のために多大な活躍をされました。

合田先生 もう一度お会いしたい！

谷口有三（昭和53年卒）

今年の5月の連休の最中に飛び込んだ悲報に耳を疑いました。あまりに早すぎる。我々、50代に入りこれから同窓会活動を楽しもうと話していたのに、主管の合田先生に他界されてしまったのです。先生のお通夜はいつまでも列が途切れず、お人柄、そして面倒見の良さがそれを物語っていました。しかし、私ほど先生にお世話になった者はいないと思います。何しろ中学に入って最初のドイツ語の授業から今の同窓会活動に至るまでお付き合いは途切れたことがありませんでした。このため沢山の思い出がありますが、臉に浮かぶ忘れえぬシーンのひとつは先生との最初の出会であった、中学1年1組の新学期ドイツ語の最初の授業のことです。私の父がMade in Germanyの信奉者であったことから、ドイツ語を履修することに相成りましたが、入学するまでドイツ語に全く縁がありませんでした。その日、髭のカール・フリーベ先生と一緒に現れた先生は若く、テレビの語学番組のような要領で初回から興味が持て、さっそく続く授業が待ち遠

しくなりました。「日本全国の中学生でお前ら23人だけしかドイツ語をやっていないんだから一番になれるぞ」の言葉がやる気を奮起しました。高校3年の夏休みには現在のPASCHにあたるDAAD（ドイツ学術交換制度）の機会も頂き、念願のドイツに行かせて頂きました。その後、サラリーマン時代のドイツ駐在中に東独国境線を先生と怖い思いをしてドライブしたことや、出張の折に先生の姫路獨協大学の学生達と飲んだことなどとても良い思い出になっています。今もフランクフルトに降り立ち入国審査官にグーテンタークと声をかける時、あの原点となった先生の授業が鮮明に蘇ります。合田先生、心の底からお礼申し上げます。

合田先生 お世話になりました！

神谷善弘（昭和57年卒）

先生は主管ではありませんでしたが、ドイツ語の授業では厳しくご指導いただき、大学4年の教育実習では温かく見守っていただきました。研究者としての先生は、日本におけるドイツ語教育のビジョンとして、「高校・大学入試・大学（既習者受入れ体制）の連携」の重要性を一貫して説かれていました。学会活動では、高等学校ドイツ語教育研究会の初代副会長や日本独文学会ドイツ語教育部会大学入試問題検討委員会の初代委員長を務められました。私がドイツ語教員になってからは、研究会や委員会でドイツ語教育改善のための活動をご一緒することができ、本当に幸せだったと思います。教科書『ドイツ文法 I C E』（朝日出版社、1995年）を共著したことも良い思い出です。I C Eとはドイツ鉄道のInter-City-Expressのこと、鉄道好きの先生が決めたタイトルです。しかし、何よりの思い出は、東京（新宿、銀座）、関西（梅田、三宮、塩屋、姫路）、ドイツ（München、Prien am Chiemsee）等で、ビールを片手に数え切れないほど語り合えたことです。「ビールと枝豆」しか注文しない先生でしたが、ビヤホールライオン銀座7丁目店の「ローストビーフ」、ニューミュンヘン神戸大使館の「地鶏の唐揚げ」は大好物でした。合田先生、公私にわたりまして本当にお世話になりました。先生のご遺志を継いで、日本におけるドイツ語教育の改善のために教育と研究に勤しんでまいります。Ich danke Ihnen herzlich für Ihre Pädagogik und Warmherzigkeit!

古川 成太郎 先生を偲んで

沖 山 秀 司 (昭和49年卒)

古川先生と言葉を交わしたのは2008年6月21日、椿山荘での同窓会懇親会が最後となった。

本年9月、同窓会の学園祭準備手伝いのため、久々に訪れた母校でご逝去の報せに接した。

我がクラスは過去一度だけ、大学生時代に一部の有志で古川先生を囲んだ会を催したのみであった。久々に椿山荘でお会いした時、クラス会をしたいです、と古川先生に宣言したものの、約束は果たせなかった。

思えば昭和43年4月、初々しい制帽を深々とかぶり、期待よりも不安が大きい中学一年一組を温かく迎えて頂いた古川成太郎先生。威厳のある顔貌とは裏腹に優しさ溢れる瞳に、我々の緊張は徐々に解けて行った。お弁当をたいらげ、校庭を走り汗かいて臨む午後の授業では、気が緩み私語が重なる、また睡魔に襲われた時など、先生は教壇に立つやら外しておいたチョーク入れの蓋を使い、机をピタッと叩き、何事が起きたか！？とびっくりするような通る音を教室に響かせ、クラス全員の集中力を復活させた。後にクラスの1人が報告した。チョーク入れは蓋がスライドして取れる



旧型と、蝶番によって蓋が上下する新型の2種類があった。古川先生は蓋を有効利用する目的で旧型の箱を愛用されていた。

小諸に行った夏、まくら投げが絶えない部屋を廻ってきてすごい剣幕で一喝された。しかし、顔には笑みを浮かべていらっしゃるように見てとれ、その安心感で皆はおとなしく目を閉じた。

一年一組は旧独クラス（クラスの半分が中一から英語を学ばずにドイツ語を学ぶ。英語は高一から第二外国語としての授業が始まった。）。古川先生には中学三年まで牽引してもらったが、独クラスの20数名は高校を卒業するまで同じクラスで居た。

古川先生は、威風堂々としていた。煙草の香りをなびかせる紳士だった。古川先生を茶化す生徒はいなかった。しかし、親父以上に親しみを覚える魅力を感じていた。天野貞祐先生からは、朝礼の時に言葉で、「社会の優等生になれ！」と教わった。そして果敢な思春期を走り抜ける少年が目指した紳士を古川成太郎先生に見たのではないだろうか。

訃報に接し、自宅に戻り中学の卒業アルバムを開いた（昭和46年3月卒業）。寄せ書きの中央では古川先生が永久に皆を見つめている。似顔絵は、クラスの丸山守弘君が描いた。特徴が、古川先生の全てが忠実に捉えられている。ダンディーな仕上がりの傑作である。我がクラスを代表して、古川成太郎先生のご冥福をお祈り申し上げます。

原田恒久先生(モスケ)を偲んで

松 田 順 (昭和42年卒 (英語))

昭和42年3月卒業で原田恒久先生に何らかの形で世話になった同窓生の一人として、先生のご逝去を悼み、心よりお悔やみ申し上げます。

先生は、我々の時代は「モスケ」の愛称でよばれ、我々はお亡くなりになるまでこの愛称を使わせていただきました。高校時代の思い出として、朝早くから数学を教え込むのが好きで、そして出来ないと「ニコリと笑いながら『ハンドプレス』をあげるぞ」といって生徒を追いかけ回すのがスタイルでした。今の親御さんから見れば「体罰だ！」と息巻くかもしれませんが、我々にとって高校時代のよき思い出です。特に理数系クラスの人を対象とした、早朝・就学時間外特訓は皆良く覚えています。勿論文科系志望者や進路が定まらない生徒は、



逃げ回るか、そっと隠れていました。

私達団塊の世代は、進学競争が大変な時代であり、先生としても何とか理工系への進学者を増やしたい、数学の楽しさ？を何とか教えたいとの一身だったのでしょう。その甲斐あって、同じ仲間でも理工系では東工大、理科大そして医科歯科系の大学に進んだ者も多くいました。又逆に無理な勉強はせず自然体で行こうよ、又俺は文科系なんだ、そのまま独協大学（設立、1-2年の大学）へ推薦で行こうかとの人もいました。（私も文系を選び、独協大学に進学しましたが）

当時、校長の天野貞祐先生は「無駄な受験勉強より、しっかり基礎的な力（人間として必要な教養、倫理・哲学）を身に付け学業に励むべし」との理想を掲げていました。この点では原田先生は理工系・医科歯科系の進学率を高めたい、数学的な考え方を身につけた文系生徒を育てたいとの理想で、天野先生とは多少ベクトルは違ったかもしれませんが、でも教育に掛ける情熱では同じものがあり、今振り返ってみると、嫌応でも数学と格闘した事は、現在まで良い思い出（いやな思

い出の方も居られますが)となっています。大学進学後、また社会人となった後も「モスケの会」と称して、つい7-8年前まではクラス会を開催すると、お年を召されてもその教育にかけた情熱はその顔からいつも垣間見ることが出来ました。人生を歩む姿勢として、又

直前まで数学といわずあらゆる分野で勉強を続けておられたことは、我々不肖の弟子(弟子にもさせてもらえなかったが)にとって、励みとも、指針ともなります。

たとえこの世のお別れが済んでも、先生のご精神、ご気迫、情熱は我々に与え続けられると存じます。 合掌

獨協祭に参加して早4年

台風15号が9月21日に関東地方を直撃し、学校が休校となり、この日から始まる筈の獨協祭準備を僅か二日間で行い、獨協祭の開幕を迎えました。しかし、生徒達はこの困難を乗り越え、無事に二日間の獨協祭を終えることができ、動員数はのべ4千人を超える実績を残すことができました。

同窓会の今年度の企画は、「真理探究に生きた第三代校長・加藤弘之先生」と「日独交流150周年」です。「加藤先生」のエリアでは、先生の年譜はもとより、13年に亘る第三代校長時代、日本人最初のドイツ語学習者としての状況、先生ご自身の学問の変遷、そして数多い著書の紹介をいたしました。「日独交流150周年」のエリアは二つに分け、その150年間に共に獨協の歴史を辿ってみました。また、日独のかけ橋となった代表的なドイツ人の紹介、日独交流150周年記念切手(日本製とドイツ製)の展示の他、外務省・ドイツ大使館・ゲーティンステットから頂戴いただきました資料を来場者の方々に自由にお持ち帰りいただきました。「獨協史」コーナーでは、「獨逸學協会と獨協学園の流れ」と題し、教壇に立っていたドイツ帝国宰相・ミハエリス、ドイツ語界の三太郎、校舎の変遷、校歌について等を写真付きで紹介をいたしました。本年もパネル展示した内容を小冊子「獨協の歴史Ⅲ」としてまとめ、ご来場者全ての方々に持ち帰りいただきました。この小冊子は、後日、生徒・教職員の全員へ配布させていただきます。

このほか、ドクターズ・クラブとサッカー部OB会の活動紹介、同窓会オリジナルグッズの展示即売コーナー及び茶話コーナーを設置しました。

同窓会の展示には400名以上の方々をお迎えするこ



とことができました。来場者の方々はこれまでと同様、PTA・在校生の他に受験生とその保護者の方々が多く、母校の側面的なサポートができたものと思っています。またアンケートには、「獨協史」に興味を持たれた方が多かったことや「とても見易く分かり易い」「このまま続けて欲しい」等の好評価をいただいたこと等、その他にも貴重なご意見を数多くいただきましたことに感謝いたします。

今回も多くの方々にご協力をいただけたことにより、獨協祭に無事展示参加することができました。加藤先生の著書に関しましては、実物を獨協中高・図書館よりお借りすることができました。そして、東京大学史料室・谷本博士と村上女史により膨大な資料の提供をいただきました。また、ドイツ大使館広報部・新藤様、ゲーティンステット・堀口様とイケダ様、外務省国内広報課・石川様、獨協学園資料センター・高橋様、展示から小冊子発行までお力をいただいた株式会社王文社・鈴木社長様、その他多くの方々に心から感謝申し上げます。

同窓会は、母校に貢献できるように何らかの関わりを持ち、その一役を側面的に担えるように努力・邁進しております。獨協祭への参加はその一環として存在していますし、それを更に推し進めるには同窓会々員皆様の協力が不可欠です。同窓会の活動がより活性化して行くために、今後の会員皆様のご協力を心よりお待ちしております。



小冊子「獨協の歴史」について

同窓会では、活動の一環として「獨協通信」を年2回発行して会員の皆様に送付させていただいておりますが、その他に毎年獨協祭（4年前より展示ブースをお借りして参加しております）に合わせて小冊子「獨協の歴史」を発行しており、今年で3巻（3年目）を数えるまでに至りました。この小冊子発行の主旨は、展示パネル内容をまとめたレジメをご来場いただいた方々に記念としてお持ち帰りいただくことにあります。併せて、全校生徒と全教職員の方々にもお配りしております。獨協祭では、多くの受験生（小学生）とその保護者の皆様が学校説明会ブースにお見えになります。またその内の多くの方々が同窓会展示ブースにも足を運んで下さいます。こうした獨協祭での同窓会活動が母校の歴史を知っていただく良い機会となり、この小冊子「獨協の歴史」も母校をアピールする側面的な手助けになりつつあります。

今年度は、会費をご納入下さいました会員諸氏に「獨協の歴史Ⅲ」を本誌と共にお送りいたしますので、どうぞご覧下さい。

小冊子「獨協の歴史」の内容は、以下の通りです。

第Ⅰ巻：「君は西周先生を知っているか？」

- * 我が校の創設に携わった人々
- * 獨協教育精神の系譜
- * 日本近代哲学の祖・西周先生（初代校長）の偉業と年譜
- * 先生を育てた津和野とは

第Ⅱ巻：「二つの人生を歩んだ北白川宮能久親王殿下、 帽章Dの生みの親・ニコポンこと桂太郎先生」

- * 北白川宮能久親王殿下（獨逸学協会総裁）の生涯
- * 知られざる親王の数奇な運命とエピソード
- * 桂太郎先生（第二代校長）年譜
- * 軍人で政治家、その業績とエピソード

第Ⅲ巻：「真理探究に生きた第三代校長加藤弘之先生、日独交流 150 周年」

- * 加藤弘之先生の生涯と足跡
- * 日独交流の歴史
- * 獨協史（獨逸学協会と獨協学園の流れ）



コラム・ドイツ

ハインリヒ・ハイネ (Heinrich Heine) さんを迎えての 創作インタビュー (下)

聞き手 柳 原 克 忠 (昭和39年卒)

柳原（以下 Y） ハイネさん、今回も宜しくお願いします。前回までは若さと情熱的恋しかし恋愛体験、又それらをベースとした詩作の数々のお話しなど伺いました。

今回は、あの名曲「ローレライ」（楽譜参照）周辺のお話しや、パリへの亡命、そしてあの名著「ドイツの宗教と哲学の歴史」のご紹介などお伺いしたいと思います。

Heine（以下 H） ハイ、了解しました。どこまでお話ししたか忘れましたが、確かに私の若き日々の常に憧れにのみ終わる恋ばかりのストーリーをお話ししました。

Y 憧れにのみ終わる恋ばかりだったわけですね。当時ハイネさんの詩は若い人に人気があったようですね。音楽的でみずみずしく美しい音韻そして、何よりも分かりやすいのが特長といわれていますね。読み手はそのハイネさんの魂の若さに魅せられたのでしょうか。一方、つぶさに読みこんでいくと、やはりハイネ

さんの情熱である愛と革命の深いつながりが恋心に響いてくるのですね。当局としては、やはり見逃すことは出来なかったのでしょうか。さて、その詩集「歌の本」の中に我々日本人にも長く歌われてきているあの名曲「ローレライ」の詩が入っているのですね。私も中学生の時、音楽の時間に歌わされました。もちろんドイツ語で。作曲者ジルヒアーの原調変ホ長調からハ長調に移調されたもので、ソソラソドシラソーファです。

H そうですか、それは大変に嬉しいことです。ドイツ語で歌ってくれたのですか。

Y ナトゥーリヒ (Natürlich) です。この「ローレライ」は勿論、日本語訳詞で日本では明治時代近藤朔風（本名逸五郎、1880～1915）の有名な訳詞 ♪♪ なじかは知らねど 心わびて～ ♪♪ で、原調より半音下の二長調の女声2部合唱で歌われました。明治42年(1909年)刊行の「女声唱歌」に出ています。同時にゲーテ作詩、シューベルト作曲の名曲「野ばら」も一緒にの頃です。ローレライのこの詩の原題は「Ich weiß nicht was soll

es bedeuten」ですね。これは「唱歌」発表以前ハイネさんがお亡くなりになって 33 年後、1889 年（明治 22 年）に文豪森鷗外によって又 1905 年（明治 38 年）には上田敏によって邦訳されています。しかし、当時のドイツ歌曲の訳詞は近藤朔風が優れていました。彼は 35 才で早世しましたが、シューベルト作曲でミュラー（Müller）作詩の「菩提樹」や「野ばら」そしてこの「ローレライ」などすべて今日まで歌われている名曲になりました。

H そうですか、この曲ローレライの詩は、1824 年の作です。何人かの作曲家がいろいろ曲にしてくれています。リスト（Liszt, Franz 1811 ~ 1886）がピアノ曲で、そして友人シューマン（Schumann, Robert 1810 ~ 1856）の妻クララ（Klara Schumann）がやはり作曲してくれました。ドラマチックなオペラアリア風でなかなか面白いです。でもやはり、ジルヒャー（Silcher, Friedrich 1789 ~ 1860）の作曲が有名です。1838 年の作曲です。原調は変ホ長調で 6/8 拍子ラとファのやはり 2 部合唱になっています。美しい旋律です。

Y クララさんの作曲した「ローレライ」は今、you-tube で聞くことができます。ソプラノの美しい歌になっています。

H そうですか、私ももう一度ジルヒャーさんやクララさんの「ローレライ」をしみじみ聞いてみたい気がします。そうそう、シューマンさんは私のこの「歌の本」から 16 編選んで、あの有名な歌曲集「詩人の恋」を完成させました。歌曲集のその詩人というのは私のことではなく、シューマンさんが、自らの運命を、恋し、泣き、歌う詩人にたとえていますので自分自身のことだと思います。そのロマン的な交感も素晴らしいものです。又シューベルトさん（Schubert, Franz 1797 ~ 1828）も他の詩集から併せて 15 編くらい採用してくれて歌曲を作ってくれています。余談ですがシューベルトさんの歌曲集の中で一番多く採用されている詩作はやはりゲーテさん（Goethe, Johann Wolfgang von 1749 ~ 1832）からで全曲合計すると 75 曲になります。次がシラーさん（Schiller, Friedrich von 1759 ~ 1805）で 68 曲です。そうそうゲーテさんには、ゲッティンゲン大学再入学した年「歌の本」出版の 3 年前の 27 才でしたが、ワイマールでお会いしました。が、ヘーゲルの講義を聞いた時のような衝撃は感じませんでした。翌年、私は 1825 年 28 才の時、ゲッティンゲン大学卒業を前にして、洗礼を受け、新教徒になりました。宗教上、思想上のそして生活上の革新として。

Y その頃、ナポレオン死後、ヨーロッパ諸国はウィーン会議後の王制を戻そうとする力と革新的な民主の思想の自由への確立など交錯した支柱のない揺れていた時代ですね。

H 私は、新教徒に改宗後、一時的にユダヤ人からも追われる立場になってしまいさらに、あのベートーベンが逝去、友人シューベルトも 31 才の若さで亡くな

り、「真の愛」や思想の自由の下「真の革命」を追求する気力は薄れていきそうでした。1828 年 31 才の時に「政治年鑑」の編集に専念し、詩作から少し離れました。そして北イタリアへの旅行にいきました。その頃から健康状態にも少しずつ問題を感じるようになりました。喀血もしました。

Y それで、気分転換でパリに向うのですか。

H いえ、その前に健康回復のため、北海のヘルゴラント島へ渡りました。その地で、1830 年 33 才の時、あのフランス「7 月革命」の報に接し、フランス人民の斗いに狂喜しました。私は、フランス人は人間社会の二つの最大の必要—よい食事と市民的平等—のために戦ったと思いました。だから、人類全体と個人との関係を見ると、人類の進歩のために個人が犠牲となって死ぬのは当然だと思いました。私は自分自身を「人類解放戦の勇敢な一兵士」だと自負しています、それは今でもです。この革命のニュースで私は大いに気力、体力とも復活したようでした。やはり私は革命の子。

Y やはりハイネさんは強いヒューマニズムで女性を愛し、社会の矛盾に立ち向かう気持や、一方で精神・思想の自由の確立、平等の権利を願う革命をも愛していたのですね。

H そうです。それから 1831 年 5 月旧ハンブルクからパリへ向いました。封建主義支配する反動の国ドイツをのがれ自由と平等が声高く叫ばれるフランスに向かいました。でも、それから生涯パリで亡命生活を送るということは予想していませんでした。私には未だ、そして又、ドイツでやることがあると信じていましたから。

Y ハイネさん、長時間インタビューご協力ありがとうございました。

今回は、2 回に亘り生誕から 34 才まで、つまりパリへの亡命に至るまでの半生をお聞きしました。又もし機会がございましたら、やはり、「ドイツの宗教と哲学の歴史」（ZUR GESCHICHTE DER RELIGION UND PHILOSOPHIE IN DEUTCHLAND）1834 年、邦訳題「ドイツ古典哲学の本質」（伊東勉訳）

ハインリヒ・ハイネ パリ亡命後の年譜

1831 年 (34 才)	パリに永住 ※ヘーゲル死ス
1832 年 (35 才)	プロシャ政府の民権圧迫に対して文筆で闘う。 ※ゲーテ死ス
1834 年 (37 才)	フランス娘マティルドを知り熱愛。 仏文で「ドイツの宗教と哲学の歴史について」を執筆。
1835 年 (38 才)	ドイツ連邦会議よりの出版禁止の第 1 号となる。
1836 年 (39 才)	小説「フローレンス夜話」を書く。 このころから 1848 年まで亡命者扶助金を受ける。
1841 年 (44 才)	8 月、マティルドと結婚
1844 年 (47 才)	マルクスと親交 「ドイツ冬物語」「新詩集」を出版
1848 年 (51 才)	2 月革命から 3 月革命。病状悪化、寝たきりになる。
1851 年 (54 才)	神への復帰を口にしながら、なお詩作をつづけ、詩集「ロマンツェーロ」を公刊。
1853 年 (56 才)	「告白」を執筆
1854 年 (57 才)	重体ながら「告白」を完成、「回想」を執筆始める。
1856 年 (59 才)	2 月 17 日死去。パリモンマルトルに葬られる。

岩波文庫 No. 418 について、少々伺えたらなあと思っています。ルターの宗教改革からカント・ヘーゲルまでのドイツ思想史で、ドイツ哲学の革新性のお話など伺えたらと思います。

H 私からも御礼を申し上げます。こんなにも私ハイネのことを日本の方々にお話したのは初めてです。お役に立てましたかどうか。又、もし機会がありましたら、あの「ドイツ宗教と哲学の歴史」についてお話しできればと思います。いままで私のことは「愛と情熱の詩人」のように言われています。それはそれで、嬉しいことですがこの著作は、ドイツ人本来の精神性とカトリック教との関係からあのマルティン・ルターから獨協のみなさんにはおなじみのカントからヘーゲルに至る、ドイツの古典哲学の革命的な性質について軽妙な語り口で現したものです。「社会思想家」で「革命家」であった私のことをご理解いただけたらと思いま

す。ご紹介いただいたように、岩波文庫 No. 418 「ドイツ古典哲学の本質」として出版されています。お読みいただければ嬉しいです。又「獨協」にお呼び下されば喜んでモンマルトル墓地から飛んで参ります。親しく皆様にお別れのご挨拶を。

Y ありがとうございました。お氣をつけて。

—— 参考文献 ——

ドイツ名詩選

生野幸吉・檜山哲彦編 岩波文庫 No. 460. 1

ハイネ詩集

井上正蔵訳 旺文社文庫

歌の本（上） 井上正蔵訳

歌の本（下） 井上正蔵訳 岩波文庫

クラシックでわかる世界史

西原 稔著 アルテスパブリッシング

目 白 だ よ り

中学サッカー部の動向

中学サッカー部顧問 松尾和明（国語科）

現在中学サッカー部は、顧問である小名（英語科）・松尾（国語科）の指導の下、3 学年 50 名の部員で月・木・土の週 3 回練習を行っています。休日は外部のグラウンドを使用し、他校との練習試合や普段はできない紅白戦などを行う日もあります。

年間の参加大会は中学校体育連盟の春季大会、総合体育大会（夏季）、秋季大会（新人戦）、文京区主催のカイザースラウテルン市長杯（夏季・冬季〔冬は 1 年生大会〕）の 5 大会です。

加えて今年度から新たに参加した大会が 2 つあります。1 つは高校サッカー部顧問である神宮司先生の紹介で参加することができた「順天堂大学カップ（3 月）」。もう一つは、都内の私立中学校 70 校が参加した「東京都私立中学校サッカー大会（夏季）」です。

今年度の戦績は、順天堂大学カップが 1 勝 1 敗、春季大会が 10 チーム中 6 位、総合体育大会が、2 回戦敗退、私学大会が初戦敗退（その後優勝校となった城北中学校と対戦。0 - 3）、カイザー杯が 3 戦全敗、秋季大会が 11 チーム中 6 位となかなか結果が出ておりません。

練習では、基本技術の強化を中心に、部員の個性が活きる戦術の向上を目指しています。また、大会や練習試合で個人とチームの反省点を話し合わせ、次に向けて課題を一つずつ改善していけるよう意識をさせながら練習に取り組んでいます。しかし、上述の通り近年はなかなか結果が残せていません。接戦になる試合が多いのですが、大事なところでの粘り強さ・気迫に欠け、勝てる試合も落とすことが続きました。試合経験の少



なさも結果が出ない原因の一つだと考えられます。

参加大会が増え、今後はより実戦経験を積んでいく予定ですが、大会期間以外は校内に試合のできるグラウンドがないためなかなか対外試合が組めません。そんな状況の中、今年度は獨協サッカー部 OB 会にも多くのご協力をいただいています。2 月に OB の大迫氏がコーチを務める馬込中学校との練習試合が実現し、8 月と 9 月にはそれぞれ OB 会との交流戦をさせていただきました。この交流戦で部員たちは試合経験を積めただけでなく、様々な年代の OB の方々からご指導を受けるという貴重な経験ができました。部員だけでなく、顧問の我々も様々なご指摘をいただき大変勉強になりました。顧問となってしまうと他校から学ぶことはできませんが、面と向かって何かを指摘・指導されるということはほとんどなくなってしまいます。獨協サッカー部を成長させるために意見を言うてくださる OB 会と交流があることは大変心強く、今後もご指導いただきながらチームとして成長を続けていきます。

同窓生の芸術分野での活動が相次いで評価される

栗山昌良(昭和18年卒)氏 平成22年度芸術院賞受章

平成23年6月13日上野の日本芸術院会館にて栗山昌良(昭和18年卒)氏に平成22年度芸術院賞が授与された。また、あわせて恩賜賞も授与され、長年の活動が顕彰された。栗山氏は本校卒業後、1954年に始めてオペラを演出され、以来多くのオペラをわが国に紹介すると共にそれらの構成・演出を手がけられ、わが国屈指のオペラ演出家の一人として活躍されている。また、その活躍の場はオペラに限らず舞台芸術全般にわたり、ギリシャ劇を始め、現代リアリズム戯曲そして大劇場の演出までその活躍の場は広い。さらに、国立音楽大学の教授として後進の育成にも尽力されている。

今年の春には帝国ホテル大阪にて舞台と観客席の区別のない大広間でのモーツァルト「魔笛」を公演された。

菊竹清文(昭和38年卒)氏 国際オリンピック委員会より DIPLOMAを授与

平成22年、菊竹清文氏は1998年の長野オリンピックに際し、その聖火台を作成した功により国際オリンピック委員会よりDIPLOMAを授与された。菊竹氏は本校を卒業後、中央大学理工学部を卒業され、彫刻家として活躍されている。その彫刻は国内外の多くの建物などのモニュメントとして設置され、斬新な空間を作り上げている。近年は情報技術をその彫刻に取り入れ、「情報彫刻」という新たな分野を開拓されている。そうした活動のひとつとして炭酸ガスの削減をコンセプトとした長野オリンピックの聖火台がある。

本校の同窓生が相次いで芸術分野で栄誉ある賞を受賞したことを心から祝福するとともに、同窓生一同の誇りとしたい。

クラス会だより

昭和18年 英語科クラス会 獨協一八会

私たちが獨協を卒業した昭和18年はまだ大東亜戦争の最中でありました。思えば中学時代は戦争の明け暮れの中で過ごしたと云えます。学校教練、銃剣術、千葉県習志野の合宿訓練、大島一泊旅行、箱根山の行軍、大変なものでした。それでも結構楽しく、遅くも学生生活を送りました。あまりスマートではありませんが、皆一生懸命でした。そういえばドイツのヒトラーユーゲントが獨協中学に来訪したこともありました。卒業式にはオットー駐日ドイツ大使が出席し成績の良い人は立派な辞書を頂き羨ましく思ったものでした。卒業後はばらばらになり戦争でなくなれた級友もありました。そして敗戦、夫々が生き抜きました。昭和25年たしか佐藤文夫君達が一部戦災から焼け残った高田馬場の「大都会」と言うレストランで集まって相談したのが最初だと思います。その後友田文夫君の世話で目黒の東京都職員組合の寮で多数集まることが出来ました。その中で石川金弥君がホテル、宴会の方に関係されており、彼の好意で赤坂電気工業会館で二日程集会を持ちました。石川君はその後ホテルニューオータニの宴会部のマネージャーとなり、また新宿の京王プラザホテルが成立しない頃からその完成に尽力され宴会部の重鎮として活躍される様になりました。そんな関係から毎年私達の会は両ホテルで開くことが出来ました。参加者も多くなり、現在の仕事を紹介したり、また中学時代に戻って先生方のあだ名やものまねを楽しんだりした事を思い出して時の過ぎるのを忘れたりしました。

恩師奥田八郎先生(いもかん)、津賀先生(つがぱん)、永田巖先生(がんさん)生理を教わった北浜章先生にもご臨席願いました。石川君は定年後市ヶ谷のアルカディアの宴会部に移りましたが、私達も引き続いてこの場所を使える様になりました。私学会館の会には恩師大久間喜一郎先生にご出席賜り現在まで続いて居ります。まあお陰様で長続きして居ります。このような事は獨協の全国同窓会でも認められて居ります。尚、同窓会の卒業年度幹事は田中建吾と友田文夫で連絡して居ります。

さて、獨協一八会と名づけたこの会の運営もお互い高齢になり従来通りに出来なくなるかもしれません。(獨協一八会の皆さんは同窓会費は免除され、同窓会報は届いている筈です。)世話人も石川金弥君が亡くなり、特に馬場保壽君の逝去はショックでありました。いつまでもこの会を続けたいと思いますが、友田君も元気とは云え昨年入院手術を受け、この会のお世話も中々難しいとの事と承りました。一応これで一区切りの気持ちも判らない訳ではありません。

昨年小関君、鈴木君とも相談し、もう一度会合し、



これからの在り方についてお話をしたいと思って居りましたが、中々難しくなりました。しかし、獨協一八会は永遠にありたいと思っています。（田中建吾 記）

昭和 20 年 5 卒くドイツ語科＞ 芽城会

平成 23 年 5 月 27 日、新宿『楼外楼飯店』で正午から常任幹事の挨拶と、牧君の乾杯の音頭で芽城会を開いた。卒業後 66 年、その時 150 人だった友は今回通知を出したのが 62 名であった。そのうち川北登君が一昨年亡くなり、昨年秋吉田豊君が亡くなった。また多くの級友は体調を壊して出席できない者がおり、また、出席の返事を受け取った後で脳出血を起こした西沢富次郎君は、会当日まだ意識不明の状態入院中であつた。83 歳を越すと何時何があっても不思議はないというが、実感した次第である。この日は 16 人の出席で会が始まった。今では専ら話題は健康に関するものが多くなってしまった。昔 30 人以上も出席があつた頃のことを懐かしく思い出す。3 時間近く旧交を温めてから、細貝君の閉会の辞で来年の再会を祈りお開きになった。

出席者：加藤一郎、平沢昭彦、鈴木勘也、藤山俊彦、米田武、黒沼昭夫、岡田太一、佐藤徳重、木村保、掛札典昭、細貝祐太郎、平田栄一、村田昭一郎、土井栄一、牧豊、神山一郎以上 16 名 （神山一郎 記）



昭和 25 年卒 大豆会

平成 23 年 10 月 6 日（木）、一昨年、昨年と同様に、霞ヶ関東海倶楽部で開催した。出席者一同日頃の善行のためか、晴天に恵まれた。一人一人が卒後の人生、現況について語った。胃癌、肝転移、大腸癌、前立腺



癌など、癌のオンパレード、はげと白髪が話題だった頃が懐かしい。孫に対する愛情、遺産分配、健康法、なかには、80 歳を過ぎてなお、小説を執筆中とか、真に人生は多彩である。大豆会から直木賞受賞者の出る日も近いのではないか。大豆会も、クラス会の常、絶対絶滅種であるが、最後の一粒まで続けようと、大いに気炎を上げ閉会した。

次回大豆会、平成 24 年 10 月 11 日（木）午前 11 時 30 分、霞ヶ関ビル 35 階、霞ヶ関東海倶楽部 世話人 鈴木規充君 （本田光芳 記）

昭和 27 年卒 花の二七会

平成 23 年 9 月 17 日（土）午後 1 時より神楽坂『トリノ』にて、昨年と同型式の午餐会同期会を開催しました。93 歳を数えられる恩師大久間先生にお元気なお姿でご出席いただいたことは一同何よりの喜びでした。出席数は 19 名に恩師大久間先生と故赤平君の奥様（トリノ社長）を加え総勢 21 名（昨年度の 2 名増）で、各位の 3 分間スピーチには野次も飛び出し、笑いの渦巻く愉快な時間が終始しました。今年も故酒井晨史君の席を賢弟 酒井府氏が埋めてくれて、今夏旅したと云うドイツ各地の土産話を語って頂きました。午後 3 時過ぎ、来年度の幹事を指名後、恩師を始め各位の健康を祈り、再会を約して散会となりました。

（幹事 泉水、塩田、久米 記）



昭和 28 年卒 第 22 回双葉会

平成 23 年 6 月 25 日（土）、巣鴨百草会館、知味采にて開催。各年に参集している会も 22 回の実績を重ね、今回は当初 3 月 26 日（土）に決定しましたが、開催当日 2 週間前（3 月 11 日）東日本大災に見舞われ諸般の都合を考え 2～3 月延期の止むなきに至りました。

初回出欠回答は 16 名出席通知でしたが再会の今回は 12 名となりました。初めて使った中華料理は静かで良心的だった事は有難く、例会は今年亡くなった高木菊雄、山崎誠、木村泰包、堀川辰夫君の献杯に続き、同窓会本部より取り寄せたパンフ（獨協の歴史、北白川宮殿下）2 部を出席者全員に手渡し、同窓生の為に今年作成した文鎮を医師の皆さん方に買って頂き喜ばれ

ました。最後になりましたが、奈良の遠方より毎回持参して頂く手みやげを腰痛の為欠席にもかかわらずご郵送戴き熱意に感謝申し上げます。（佐藤明徳 記）



昭和 31 年 ドイツ語クラス

23 年 6 月 1 日 恒例の 31 年卒ドイツ語クラス。クラス会を銀座獨協倶楽部で開催、今回の出席者は 10 名と少なめですが、先立って 1 月 23 日ビストロ MARUNE 有楽町で新年会を開き、その折今回欠席の 2 名も参加してくれました。

東日本大震災の被害の一日も早い復興を願い全員、東北の地酒で杯をあげて開宴です。皆出席で遠方からの参加者でしかも阪神淡路災害の被災者である兵庫県芦屋市在住の小野君に阪神淡路災害の被災者が見た東日本大震災と題してテーブルスピーチをお願いしました。自然の猛威の前で生死をわけた経験をした人の言葉は重く、その大震災の被害者の生活の苦しさを思う心に感銘をうけたスピーチでした。

そのあと大谷君の提案で各自の近況報告。出席者の今まで知らなかった一面も出てきて、ますます雑談で会は盛り上がり、友人一同またの再会を約して散会となりました。（山口眞護 記）



昭和 37 年 獨協 37 年会

昭和 37 年卒業後 50 年を迎え、1 組を中心に 4 月 9 日、湯島のすき焼き「江知勝」にて、小島晋冶先生を迎え、震災の影響か参加者はいつもより少なく 17 名で同窓会を開催いたしました。宴会前に、学校を訪問し新校舎、資料室、地下体育館などを見学、その後、湯島天神でお参りし、震災の被害者への祈念をしまし

た。今まで 10 回ほど開催していましたが、近年は過去 5 年、毎年欠かさず開催し、25 ～ 30 名程の参加者で盛況となっております。一組が中心となっておりますが、他の組も多数参加していますので、37 年卒業生の方へご参加ください。尚、毎月第 3 金曜日に目白駅下車「カフェ、ハギ」目白 3-14-20, TEL 03-3565-2424, 目白四輪馬車ビル 3 F で 4 時～8 時頃まで参加者自由で集まっていますので、ぜひ参加して下さい。連絡は一寸木 TEL 03-3315-7400 まで。

なお、物故者は、三塚勇、田中譲、竹井征二、藤井勝、加藤悦宏、横山理吉、長浜友夫の諸兄です。



昭和 39 年 「39（サンキュー）会」 発足

前号（76 号）での呼びかけで、初めて 39 年卒の会「39 会」が、7 月 10 日（日）大塚「ホテル・ベルクラシック」で発足。ご指導いただいた新宮先生、吉田先生、本田先生などご出席頂き、総勢 35 名の集いとなった。今回は呼びかけ世話人として、大塚正行君、加藤知樹君、田村宏君らのご尽力で、お互い 47 年ぶりの再会も含め、誰が誰やら判らず、驚きと賑やかな歓声の会であった。

先生方からのお話にも（昔と相変わらず）殆ど聞かず、聞こえずで用意された料理も大量に残ってしまうほどの盛り上がりであった。今後も、又年一回は開催することを約し散会。

その一ヵ月後、我が主管であった「原田恒久先生ご逝去」の報をご子息から伺いました。8 月 11 日（木）告別式に参列し、今までのご指導への感謝とご無沙汰のお詫びやご冥福をお祈り申し上げます。 合掌（柳原 記）



昭和 41 年 獨協 1 月会

平成 23 年 1 月 15 日（土）、川越在住の守田君を幹事として「いも膳」にて開催しました。出席者は、佐藤和美君、小杉喬志君、斎藤幸一君、堀江重之君、森田芳和君、長村洋君、中村昭美の 7 名と少ない参加者になりましたが、46 回の長期の開催をしてきましたので、続けていこうということになりました。

今回参加はしていませんが、河崎達彦君の提案で、神田先生の墓参りを 10 月に実施したいとのことでした。来年は 1 泊旅行にして、上林先生の処に伺おうかとの話もで、平成 24 年 1 月 21 日～22 日の開催予定になりますので、早めに連絡をいたしますので、参加をください。（中村昭美 記）



昭和 49 年 金有一先生クラス会

平成 22 年 11 月 20 日（土）、恒例の金先生をお招きしてのクラス会が、初の校舎見学後に音羽通りにある寿司屋「豊島」で行なわれました。いつもの懐かしい話、自身の不健康状況話などで盛り上がりました。しかし卒業して 36 年、教え子である我々の中には、容姿で金先生を抜いてしまった者もいました。

（幹事・白須賀、金澤 記）



昭和 53 年 獨協高校卒ハーフ会

去る 5 月 21 日（土）に上野焼肉太昌園にて富岡卓先生をお招きして、恒例のハーフ会が開催されました。当日は久しぶりに窪谷君も参加してくれて和気あいあ

いと楽しいひと時を過ごしました。途中今回の震災後、岩手県で医療支援のために出張された庄司君より貴重な現場写真の解説があり、一同被災地の無残な姿に愕然といたしました。庄司君お疲れ様でした。卒業して 30 年以上たつと、親の介護や逝去、子供の進学問題、自身の健康問題（特に肥満、筒井・小俣君やばいぞ）などなどいろいろありますが、人生ハーフ、残りの人生たまには獨協時代に帰り楽しめればと思っています。皆さん、また来年お会いしましょう。

（西原由恭 記）



昭和 56 年 3 年 5 組 児島先生クラス会

7 月 16 日（土）に池袋東武デパート 15 F「華湘」において、クラス会が行われました。卒業後何回かクラス会を開きましたが、20 数年ぶり、卒業後 30 年めで、会った瞬間はだれ？という感じでしたがすぐに判り、昔にもどり懐かしい話に花が咲きました。児島先生がとても若々しく、生徒の方が年上ではないかと思う者もいて、思い出の写真も撮りました。当日は予定が入っていてどうしても来れない者や、震災のボランティアに行っている者、二次会からかけつけた者などいましたが、18 名の参加がありました。次回のクラス会は児島先生の古希のお祝いをしようと、4 年後に再会の約束をしてお開きとなりました。

（幹事 上原・宮澤・高島・田中 記）



合田末っ子会

平成 23 年 8 月 6 日池袋にて、昭和 60 年卒 3 年 1 組の同窓会を行いました。合田先生の訃報を受け、「合

クラス会だより

田先生を偲ぶ会」として開催し当日 21 名が出席、26 年ぶりに懐かしい顔ぶれが揃いました。合田先生との思い出や、仲間たちとの楽しかった思い出、また苦しかった思い出(?) など、様々な話題を、大いに語り合い、大いに楽しんで盛り上がり、さながら教室のような雰囲気でした。

今後は、この会を「合田末っ子会」と名付け、事あるごとに開催していきたいと思います。合田先生は担任されたクラスを、長男、次男、三男、四男と呼んでくださっていたと聞き及び 命名しました。合田先生のご冥福を謹んでお祈り致します。(高梨 記)



昭和 60 年 3 年 5 組クラス会

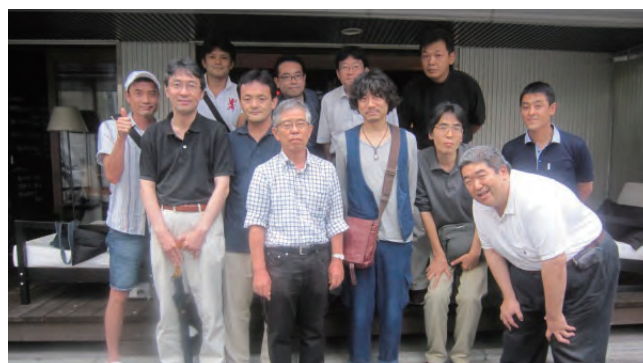
7 月 9 日(土曜日)に主管田村先生をお招きし、クラス会を四谷「福の花」にて開催しました。このクラス会はこの 3 年連続して、7 月の第二週の週末に開催しているものです。仕事の関係で遅れて参加してくれた方を含め 13 名のメンバーが集まることができました。毎度繰り返される、過去のエピソードにはメンバー一同笑いが止まりませんでした。この後、2 次会、3 次会と続き、AM 2 時半まで話は続けました。タクシー帰りになるくらいなら来年は熱海という声もあります。来年も元気で集まりましょう。(井手久雄 記)



昭和 61 年 1 組クラス会

2011 年 7 月 30 日(土)午後 3 時より「恵比寿橋カフェ」にて、クラス会を開催しました。私たち 1986 年卒業 1 組ドイツ語・英語混在クラスは、

卒業後も定期的にクラス会を開催してきました。2 年から 3 年周期で行ってききましたが、今回は、15 時からカフェを貸し切って健全に開催してみました。お昼のためか、参加者は柏葉先生を含め 13 名といつもより少なかったですが、久々に会うみんなの顔が懐かしかったです。すでに獨協高校を定年退職されている柏葉先生もお元気でなによりでした。これからも定期的にクラス会を開催しますので、40 代半ばの男同士で語り合いましょう!(波多野 記)



サッカー部OB会(現役生との交流戦)

2011 年で創部 55 周年を迎えるサッカー部のOB会です。8 月 28 日・9 月 19 日の両日、巣鴨駅近くの養和スポーツクラブグラウンドにて中学サッカー部小名先生、松尾先生のご協力の下、先生方にもOBチームにご参加していただく形で交流戦などを行わせていただきました。18 年前、小名先生方々のご指導により都大会進出(当時高校サッカー部)を成し遂げた面々なども集まり懐かしさを感じながら現役中学生との交流を存分に楽しませていただきました。

幅広い世代から成るサッカー部OB会では、学習院OBチームとの定期戦や獨協体育館上をに使わせていただいての練習、文化祭参加、懇親会など各種イベントを行いながら、世代を越えた交流を大切にしたいと考えています。ご興味・ご関心を抱かれた方は、下記までお気軽にご一報くださいますよう、お待ち申し上げます。

沖山秀司(昭和 49 年卒): h-okiyam@fk9.so-net.ne.jp

田林綱紀(平成 6 年卒): bett_rhb@hotmail.com

HP: <http://www.tsuna-tsuna.com/DFCOB.html>



平成 23 年松本歯科大学獨協会

本年 3 月に発生いたしました東日本大震災に被災された方々にお見舞い申し上げるとともに、犠牲になりました方々及びそのご遺族の方々に深く哀悼の念とご冥福をお祈り申し上げます。

本年の獨協会は新宿神楽坂のかぐら坂志満金にて平成 23 年 6 月 11 日（土）に開催いたしました。

本年の松本歯科大学獨協会は開催予定時期が 3 月 11 日に発生した東日本大震災の直後という事もあり、開催日の変更か中止も考えましたが、このような時こそ、高校・大学が同じ仲間が皆で集まり励ましあったり、会の開催を周知し、今回参加できない獨協会の先生方の元気や力になればということで開催しました。今回も、松本歯科大学 2 期から 22 期卒業生 15 名の先生方にお集まりいただいて、一次会は大変な盛り上がりの中で最後に参加者一同記念撮影後、二次会を近くの CANALCAFE に場所を移し、「あずさ号」などの中央線電車を肴に今年も深夜まで大変な盛り上がりの中、三回となりました。（橋口（昭和 53 年卒）記）



さいたま目白会

さいたま市周辺の獨協同窓生の開業医ないし勤務医を対象に病診・診診連携を目的に「さいたま目白会」という学術講演会を立ち上げました。この会は寺師義典（昭 50 年卒）を代表世話人に、田中正顕（昭 53 年卒）と私が世話人になり、今年で 3 回目を迎えました。今回は岩槻南病院の丸山泰幸院長（昭 59 年卒）に「当



院におけるカテーテル治療の実際」という演題にて講演をしていただきました。14 名の参加者があり、講演会後の情報交換会では、専門が異なる上世代を超えた意見交換を行い大変有意義な会になりました。参加者は箕田進（昭 47 年卒）、原正彦（昭 48 年卒）、鈴木忠臣（昭 51 年卒）、島田裕司（昭 52 年卒）、成田亨（昭 53 年卒）、大熊一成（昭 53 年卒）、鷺谷敦（昭 53 年卒）、鈴木英彦（昭 57 年卒）、安富文典（昭 57 年卒）、須賀幾（昭 59 年卒）です。（敬称略）今後も継続していきますので、お近くの同窓生は是非声をかけて下さい。（鈴木義信（昭 50 年卒）記）

第 5 回杉並獨協会

平成 23 年 5 月 8 日、荻窪・東信閣で杉並獨協会を開催した。今回は平成 22 年 7 月に行われた杉並区長選挙で見事当選し、区長に就任した獨協会の中では中心的な存在であった田中良（昭 54 卒）君の就任祝いを兼ねての親睦会となった。会の大御所・和田雄幸（昭 25 卒）先輩の乾杯と挨拶の後、田中君から区長としての苦労話し、出席した 20 人の会員から近況報告と区長に対する激励やら要望、同窓会から祝電も届き同窓ならではの楽しい会となった。（長田 茂（昭 54 卒）記）



ワンダーフォーゲル部OB大親睦会 2011

今年も 9 月 17 日、18 日すっかりリニューアルされた小諸の日新寮で開催された。私共夫婦もワンゲル出身ではないがここ 5 年ほど特別参加させて戴き、かつ



ての山男達と昔の写真を肴に夜遅くまで大いに盛り上がり、翌日山登りをするのが楽しみである。私共の英語の先生だった渡辺先生がワンダーフォーゲルと言う野山を歩いて健康的な部活動が早大ではやっている話を熱く語られていたのを走馬灯の様に思い浮かび、そ

の時以来 55 年部活が続いているのを頼もしく、且つ師弟揃って白髪になるまで酒を酌み交わす事が出来るこんな良い部活はすばらしいと思った。また、来年も楽しみである。
(橋本正樹(昭 32 年卒)記)

私の近況

● 3 月 1 日で 104 歳、二年前からお世話になっている大阪枚方市にある老人ホームで曾孫達と祝いました。(長男記) 牧 祥三(大 13 卒)

● 99 歳。元気にしています。但し、腰が抜けて歩行不能となりました。「遅速、我蟻も走らばそれなりに」の心境です。 鈴木 浩(昭 04 卒)

● 90 歳台を歩み、この諺を忘れません。それはヤコブ・ザール先生から教わった“Ende gut,alles gut!”です。 高橋 善三(昭 11 卒)

● 獨協通信は楽しく読ませていただいております。年相応に何とか、何とか元気で息子の代診を勉めて居ります。 中島 一(昭 12 卒)

● 小生年金生活の毎日ですが、現在中野区民交響楽団に所属して年 2 回の定期演奏会の為の練習の毎日です。今秋の曲目は「ブラームス交響曲 No. 2」他です。(担当バイオリン) 小澤 武彦(昭 14 卒)

● 毎日、読書、散歩等引退の生活をして 2 年になります。同窓会報を楽しみにしております。大学進学率向上を希望しております。 高橋 芳和(昭 16 卒)

● 『獨協通信』(76 号)の中にローレライの歌詞が掲げられていて、70 年も前の勉学の間に口づさんだもの悲しさと当時の戦いへの興奮を改めて思い出しました。現在、米寿の老骨を騙し騙しつつ中山道を 1 人歩いて記録しています。学友との連絡も途絶えて寂しい日々です。 高松 秀明(昭 17 卒)

● 小生 80 路の半ばを越し、最近とみに老化現象が進んでいます。4 月下旬頃より体調を崩し、目下病院にて検査中です。 桜井 保光(昭 17 卒)

● 都内に広島長崎の被爆者は 6500 人程いますが、1 km 以内で被爆した生存者は 3 名となり愈々年貢の納め時も近い。生きている中に核兵器の廃絶をと運動を続けて来たが、原発の事故で加速されれば申し分無し。原発は CO は出さぬと宣伝して来たが始末に負えない未完成の代物で 100 万 kw 当たり冷却海水毎秒 80t、8℃上昇し、地球上にある 550 ヶ所の原発が海水を温め、温暖化の原因であることを知らしめなければならない。 尾崎 守夫(昭 18 卒)

● 元気で自然浴(水浴・大気浴・光浴)を育むことで健康づくりを推進する新しい取り組みを始めました。 植田 理彦(昭 19 卒)

● 現職時東京都多摩地区小学校校長を 6 ヶ年。退職後青梅市連合自治会長 6 年を経て現在無任。 佐久間 定吉(昭 19 卒)

● 開業医でしたが閉院して 8 年になります。(84 才)職業別 No. に無職の欄も必要な様です。

佐藤 信行(昭 19 卒)

● 外務省で多年ドイツ語圏に勤務。在ミュンヘン総領事等をへて 1989 年定年退職。その経験等を念頭に小説を試み「ミュンヘン狂詩曲」は一昨年伊国屋書店の推薦図書。 田村 康三(昭 19 卒)

● 老々介護(83 歳、80 歳)の毎日ですが、何とか元気(?)に過ごしています。 水野 秀昭(昭 20 卒)

● 傘寿もとつくに過ぎましたがお蔭さまで年なりの健康を保っております。体力・気力・集中力の低下は止むを得ません。 中 東策(昭 20 卒)

● 健康で年金生活を楽しんでいます。学友も約半数を失い、同年代の友人も失い淋しい限りです。年をとると淋しさが増します。同窓会との交流を良くしたいと思っています。 黒沼 昭夫(昭 20 卒)

● サッカー部顧問であった吉田卓司先生のお声で 2011 年 1 月 16 日、サッカー部 OB 会によばれました。私は大戦開始の年の部員でした。 藤富 保男(昭 20 卒)

● 現役で歯科医をしています。ただいま体調をくずし療養中です。皆様よろしくお願い致します。

小森 一郎(昭 20 卒)

● 関口台の高台を巣立って何年になりますか。同窓の友人からの年賀状も少なくなりました。学園は元気に活動している様で何よりです。今後ますますのご繁栄を祈念いたします。 眞船 順(昭 21 卒)

● ポピュラーピアノプレイヤーとして 60 年、お蔭さまで現在も仕事を続けて居ります。

秋満 義孝(昭 21 卒)

● 永井先生の 11 年間の業績「天野理念」を 21 世紀に引き継がれた先生、次世代を温かく見守り頂き、同窓として感銘深く感謝します。 小川 晃(昭 22 卒)

● 卒業 64 年。未だに造兵尾久工場の動員、3 月 10 日大空襲の記憶は薄れません。あれから、われわれにどんな Fortschritt があったのだろうかと考えてしまいます。 鈴木 伸(昭 22 卒)

● 元美術部員として水彩画を描いています。故仁戸田先生のお人柄と足跡を改めて思います。水彩画界では著名なかただったと知りました。 橋本 徳朗(昭 23 卒)

● 会社定年後不動産業を営業していましたが、昨年末廃業致しました。 阿部 龍男(昭 23 卒)

● 私は卒業後慶応大学法学部に入り卒業後萬有製薬に入りました。退職後も 75 迄仕事をしましたが今は孫の大学生活を支援し自分は好きな政治の本を購入し、晴雨雨読の生活をしています。 佐藤 正志(昭 25 卒)

● 無職・高齢・体調不良・細々と生きています。 根来 恭雄(昭 25 卒)

● 23 年度大学別合格者の内容をみて、学生の学力向上が認められます。関係者のご努力の結果だと思います。独乙語が未だ頭の片端に残っています。会社生活で独乙への出張が一番多かったのも何かの縁を感じます。

橘 泰 (昭 25 卒)

● 煙草も止め、車の運転、自転車も止め、商売も殆ど止め、永年職めた商店会長も辞めたのだが、毎晩 2、3 合の酒だけは止められずほろ酔い気分で落語の CD を聴き乍寝るのを常としている昨今です。志ん朝の落語歯切れが良く好きです。

筒井 昭 (昭 27 卒)

● 目下の所元気です。読書研究会時々の山歩き等で多忙でもあります。

酒井 府 (昭 28 卒)

● 親友川口喜八郎君の三回忌を迎えた。最近淋しさが身にします。読書を唯一の楽しみとしています。

西野谷 忠男 (昭 29 卒)

● 23 年度合格者 6 年 (中学・高校) 制の改正により良くなってきましたね。早く私達の在学中の同格だった海城、巣鴨、城北に追いつく様スタッフの皆様頑張っているようですね。

長畑 茂 (昭 30 卒)

● 玉川大学を定年退職して 9 年目に入り、日本フルート協会の常任理事としてボランティアで 2001 年より事務局長、フルートを愛し音楽を愛する人々の為に微力ながら勤めて居ます。今年 8 月には滋賀県大津で第 15 回日本フルート・コンヴェンションの準備で忙しくして居ります。

佐々木 親綱 (昭 31 卒)

● 卒後 54 年になります。孫が中 3 でお世話になっております。5 年前に膝の皿を割りました。脳や心臓の機能は落ちていますが、今の所目だった不都合は出ていません。

小池 博之 (昭 33 卒)

● 昭和 34 年卒古稀記念合同クラス会に参加、久しぶりに出会う友人、元気な恩師との和やかな語らいと思ひ出の多い会でした。

外川 勝久 (昭 34 卒)

● 学生時代 (大学) から続けている男性合唱とスキーを続ける為の基礎体力維持にプールを活用する生活を送っております。健康には恵まれ、クラスメイトの大沢悠里君の長寿番組に負けなようにと思っております。当日は 6/25 の演奏会の為の練習の為出席できません。

吉本 明康 (昭 34 卒)

● 私はセガ・サミーホールディングス株式会社の会長兼社長 C.E.O をしており、又セガ社サミー社の C.E.O をも兼任しています。2011 年売上約 4000 億、利益約 690 億を出しました。今後世界のエンターテインメント企業として成長させていきたいと思ひます。

里見 治 (昭 35 卒)

● 来春古稀を迎える為、五体のチェックを行い、好きな Golf と Ski を末永く楽しみたいと願って、元気にしています。

浅沼 博 (昭 35 卒)

● 来年古稀を迎えます。何故か獨協時代の仲間との付き合いに気が休まります。今気をつけていることは「体と家庭の健康」です。最終目標は介護不要の「ピンコロ」です。

黒沢 駿雄 (昭 36 卒)

● ただいま 67 才です。3 つの保育園の事務長として保育園の運営に携わっております。今回県の監査が直

前にせまっておりますので欠席致します。

宇都見 忠 (昭 37 卒)

● 日大の建築を卒業し父親の会社に入り 50 才の時離れ独立し後現在迄息子に託すべく活動していましたが、やっと自由な近頃です。

蓮池 攻 (昭 37 卒)

● 日本の詩人・作家の声を立ち上げるため、2006 年 10 月 14 日詩人白石かずこさんの声からプロジェクト「La Voix des Poetes (詩人の声)」を立ち上げ、プロデュースし、全て立ち合い、去る 5 月 23 日までに第 637 回に達しました。

松本 匡史 (昭 37 卒)

● 特記すべきことなし。

小林 正巳 (昭 37 卒)

● 昨年 40 数年振りに獨協祭を見ました。生徒の皆さんとても利発そうな方ばかりで、我々のとき否自分はどうかだったかなと思ひました。

安田 種光 (昭 38 卒)

● 父が牧師、母が米国籍の私が晩年愛媛でお酒造りとは思ひもかけぬ境遇ではある。清酒の凋落は永く深く緊張の連続だったが今や道楽傍々「生涯現役」と割り切っています。

宇都宮 繁明 (昭 39 卒)

● 山形県の公立病院の院長として医師及び講師の確保、医師会活動等多忙な毎日を送っています。東日本大震災の折は被災地への医療スタッフ派遣及び被災者の受け入れと、又交通の遮断によるガソリン、医療機器の搬入不足と苦労しました。

木内 博之 (昭 40 卒)

● 毎年クラス会、古川 38 会開催に関しまして、同窓会よりのご援助感謝いたしております。毎年 6 ~ 7 月開催ですが、震災後間もないため本年は 10 月に予定しております。今年もよろしくお願い致します。

遠藤 和男 (昭 41 卒)

● 神田先生がお亡くなりになり、さみしい限りです。多くの同級生は現役をしりぞき年金生活の方が増えていますが、私の仕事は停年がないのが欠点といえは欠点ですが、多くの患者さんの為に少しでも役に立てばと考えております。

長村 洋 (昭 41 卒)

● 1981 ~ 83 年スイス・チューリヒ大小児科留学。2000 年に慈恵医大を助教授で退職。父の診療所を継承。2007 年「風邪の話」(日本医学館) 上梓。以降雑誌等の依頼をよく受けるようになっている。

松永 貞一 (昭 41 卒)

● 天野貞祐校長が長く引き合いに出されていた“見る人の心ごころに任せおきて高嶺にすめる秋の夜の月”でありたい心境です。

矢島 純 (昭 43 卒)

● 昨年 3 月定年退職。責務を無事終了。まだ予力が残っていたので、再任用校長として都教育充実発展のためがんばっています。

本間 和久 (昭 44 卒)

● 定年に近づいていますが、健康です。クラシック音楽を聞くのを楽しみにして 1 回 / 月程度コンサートへ行っています。

木島 孝嘉 (昭 47 卒)

● もう先が見えてきた我が人生。獨協のおかげで医師になれた。世の中も味方してくれたと感謝に耐えない。願うは学園の隆盛のみだ。以上

難波 潤 (昭 47 卒)

● 娘 2 人のため、獨協にはお世話になりませんでした。長女が結婚、次女も公務員となり親として一息ついたところ。合田先生のご冥福を心からお祈り申

私の近況

上げます。 真田 毅 (昭 47 卒)

● 50 歳でサラリーマンを辞め、その後体をこわしてしまい身体障害者になってしまいました。脳に除細動器を埋め込んでいます。しかし社会人とかかわりを持っていく、現在「浦和区民会議」という組織で副会長を務めています。 瀬下 文男 (昭 48 卒)

● 4 月より校長として朝霞第三中学校で勤務しています。獨協高校・大学で私が学んできたことが大変役に立っております。中学の英語教師として長く仕事してきましたが、教頭校長という立場での仕事の楽しさを感じています。健康で仕事ができる事が幸せです。

飯塚 睦 (昭 48 卒)

● 結婚 30 周年、ソニー生命に転職して 20 年。そろそろ第 2 の人生設計を考えねばと思いつつ、気持ちだけはいつも青春真っ只中！ 五十嵐 整 (昭 48 卒)

● 獨協中学・高校で美術科講師と美術顧問をしています。自宅で美術作品制作もしています。

渡邊 哲之 (昭 49 卒)

● 近くの病院で整形外科勤務医として働いています。同じクラスだった藤沢寛君はアメリカ人の精神科のドクターを妻とし、現在アメリカで元気に暮しています。

中山 貴士 (昭 50 卒)

● 7 月 9 日心臓核医学談話会の代表世話人として会を主催します。心臓移植の話題や心筋症について世界の話題を含め討論する予定です。 岡崎 修 (昭 50 卒)

● 開業して 20 年目になりました。変わらぬ穏やかさと医師としての使命を胸に日々診療を続けて参りました。震災後人の生死という深遠な命題を考えるとより一層人との対話を大切にしようと思いました。

宮下 浩平 (昭 51 卒)

● 獨協通信に自分の近況が紹介されたのがきっかけで、ここ岡山で同窓の先輩と巡りあう事ができ大変心強く感じました。獨協出身でよかったなと…

平山 雅仁 (昭 52 卒)

● 未曾有の災害に同窓生の安否を案じておりますが、知る術も無くただ無事を祈るのみです。同窓会で詳細わかりましたら是非告知お願い致します。

久志本 明人 (昭 52 卒)

● 栃木県全域に住む進行癌患者さんの在宅療着を支援しています。2006 年 11 月以来 450 名以上の患者さんを自宅で看取りました。 渡辺 邦彦 (昭 53 卒)

● 平成 8 年 12 月に父の後を継ぎ、野村病院院長に就任しました。平成 22 年に法人化本年創立 50 周年を迎える事になりました。又、透析クリニック“ひまわりクリニック”も創立 10 周年を迎え、本年は新に介護施設もオープン予定です。 野村 芳樹 (昭 54 卒)

● 次男が今春より獨協中学にお世話になります。入学式では光栄にも代表でありさつもさせて頂いており、親として OB としてうれしい限りです。

田中 邦彦 (昭 57 卒)

● CM のカメラマンのかたわら、Web プロデューサーとしても活動中！ 秋本 威 (昭 57 卒)

● 6 月 12 日に又南インドのケララ州に戻る事になり

ました。又いつ日本に帰って来るかわかりません。

山ノ下 達 (昭 59 卒)

● 東村山市歯科医師会の理事になりました。今年は私の母校日本歯科大学に 7 人合格という事で、東京都日本歯科大学北多摩支部でも理事をしているので後輩の皆さんお待ちしています。 細野 正博 (昭 60 卒)

● 獨協通信にて 2 年先輩の方が埼玉県坂戸市で内科を開業していることを知り、私と母はそれ以来通信しております。医師としても人間としても立派で、後輩として大変誇りに思います！ 笛木 忠昭 (昭 61 卒)

● H 22 年より父のクリニックを継承しました。埼玉県草加市で小児科のクリニックを開業しました。

井口 正道 (平 02 卒)

● H 21 年 7 月に音羽で歯科医院を開業しました。中学校と慣れ親しんだ場所で仕事が出来ることがとてもうれしく、楽しく毎日を過しています。

星野 高之 (平 03 卒)

● 三月にオーストリア大使館勤務からドイツ大使館に移動となり、今年は日独交流 150 周年記念にあたり忙しい毎日です。 堀 智宣 (平 04 卒)

● 現在イギリス Portsmouth Business School にて MBA 課程を修了し帰国したばかりです。

本條 寛人 (平 07 卒)

● 現在は伊藤公一院長のもとで働かせていただいております。元気でやっております。

久保田 伊哉 (平 07 卒)

● 大学在籍中です (医師をめざして勉強中) 勉強、部活、遊びと学生生活を楽しんでいます。皆様方、くれぐれもおからだご自愛下さいませ。委任状よろしく願い申し上げます。 菊田 龍 (平 16 卒)

● 結婚し敢太郎という息子が生まれました。幸せですがさらなる幸せを目指して絵本を描いております。ペンネームはまつなみゴリラオブゴリラ。 松浪 敢 (平 16 卒)

● 公認会計士として税務コンサルティング業務を行っています。獨協公認会計士・税理士の会を創設できれば幸いです。 富澤 佳祐 (平 17 卒)

● 法科大学院へ進学し、今まで以上に勉強しています。

本田 諒 (平 18 卒)

● 現在、東京外語大大学院修士一年。ドイツにおける日本語教育を研究中。母校よ、独語の灯をたやすことなかれ。 高井 隆介 (平 19 卒)

● 大学 2 年になり課題のレポートに追われ、公務員の勉強そしてボーイスカウトでは副長になり、日々子供を楽しませるために頭を抱えています。毎年 5 月になると、獨協同窓会が楽しみで待ち遠しいです！

江連 昌秀 (平 21 卒)

● 平成 23 年 4 月 日本大学生物資源科学部獣医学科入学。 鈴木良隆 (平 22 卒)

● 駿台予備校に浪人生として受験勉強をしています。体は健康そのものですが、運動不足が気になります。

上野 美勇 (平 23 卒)

● 大学に入学して獨協中高時代が懐かしく思われます。生徒諸君が中高時代を満喫されるよう願っております。

私の近況

ます。 畠山 晋之介（平 23 卒）
●今年大正大学文学部歴史学科日本史コースに進学しました。今回の同窓会を楽しみにしています。

羽場 太一（平 23 卒）
●獨協卒業の翌日に起こった大震災により、大学は入

学式を中止、授業開始が5月になるなど、人生の節目は異例の春となりました。 久保田 仁（平 23 卒）
●東京大学理科一類に進学致しました。応援部吹奏楽団に入部し、平日は勉学に、土日は応援に励んでおります。 小島 隼一（平 23 卒）

同窓会名簿の取り扱いと年度幹事の選任について

クラス会だよりに見えるように多くの学年、クラスで同窓会、クラス会が開催され、同窓生が旧交を温めていることは、同窓会の活動としても最も中心的なものと考えます。それぞれの学年、クラスにおかれては同窓生の動向を把握されているところと思われるが、同窓会としても卒業生の動静を含め卒業生の情報の管理については細心の注意を払いながら進めているところである。個人情報保護法の制定以来、個人情報の取り扱いはより慎重であることが期待されている。同窓会名簿は各種販売業などの貴重な資源となっており、時としてその利用が個人のプライバシーを損ねる事態も起こっている。同窓会と言えども個人情報保護法という個人情報取り扱い事業者として位置づけられている。同窓会では、同窓会名簿が名簿業者な

どの手に渡らぬよう昨年度作成した同窓会名簿から配布先を限定することとした。

同窓会名簿は同窓会に置いたPCで管理運用し、印刷物としての名簿は原則として各年度幹事のみ配布することとした。もちろん、同窓生であれば申し出により卒業年度の名簿は同窓会事務局にて閲覧複写は可能ではあるが、原則、年度幹事を通してそれらの情報を利用させていただくこととなった。

このことから、各卒業年度の年度幹事の役割がひとつ増えることと責任の所在が明確となったものと思われる。未だ、多くの年度において年度幹事が選任されていないようなので、年度幹事を選任の上、同窓会事務局へ登録されることを願います。

クラス会幹事の皆さまへ 学園祭・同窓会総会にあわせてクラス会の開催を！

おわびと訂正

獨協通信 76 号「クラス会だより」の「獨協五三会」の記事中、写真を他のクラス会のものと取り違えて掲載しました。関係者の皆様にはご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。なお、写真につきましては幹事の村田様に確認したところ、今回の写真は不掲載とのこととして取り扱うようご指示がありました。また、掲載の写真のクラス会については以下の記事を持って変えさせていただきます。

「昭和 20 年 4 年 1 組卒業クラス会 平成 22 年 11 月 9 日（火）、新橋の九州工大鳳龍クラブで今年度秋季クラス会を行いました。お互い 81～82 歳となり、参加者 5 名とやや淋しいクラス会となりましたが、時局談義や学徒動員時代の思い出話で盛り上がり、楽しいひと時を過ごしました。写真は左から井上富夫、加藤壽吉、桂義之、黒川（池田）泰三、坂本敬三（桂義之・記）」

今後、編集には一層の注意を払うよう務めますので、読者諸兄のご寛容の程をお願い申し上げます。

編集後記

学園祭も終わり、母校は来春の大学入試に向けた態勢に入っているようです。今春は母校から 2 名の東大生を出したとのこと。喜ばしい限りです。若い人たちが上を目指すこと。そして多くの先輩方が各界でご活躍との報に触れ、母校のますますの発展が期待される昨今です。

さて、年度幹事の選任についてですが、そのためにはクラス会の開催が必要だと考えます。最近、大学などでもホームカミングデーと称して、母校のイベントにあわせ母校を訪ねる企画が見受けら

れます。クラス会の開催も同窓会総会、懇親会、学園祭などに合わせて開催してみたいかがででしょうか。

本年度の学園祭に際しては、2～3 クラスでそのようなクラス会が開催されたと聞いて居ります。日ごろ訪ねる機会の少ない母校をこうして訪ねてみたいかがででしょうか。在校生の様子に往年の自分を重ねてみるのも、忙しい日々にあって初心に帰るよすがともなりましょう。（竹文）